

# フランス語を教える技術を磨く

——授業活性化のために：実践報告——

前 田 美 樹

## How to Brush up the Skill in French Teaching: Report on the Practice in Class toward Further Activation of Language Competence

MAEDA Miki

**Abstract:** Based on my observation, this report aims to show the organization, the program and its contents of a summer internship program in France, which is held from August 5 to 16 in 2019. To improve the French teaching skills, some efforts are already promoted to organize the Faculty Development in Japan, but we have some limits to clarify the better skills for our students and how to develop it in the multicultural context, which environment is more and more important as experience influenced by different culture, ethnicity and nationality.

So, in order to examine how to brush up the teaching skills in the multicultural environment, I participated as one non-francophone in the « Stage pédagogique d'été 2019 » at Besançon in France, which participants were mainly composed of French teachers from all over the world. This article seeks to reveal that the “better skills” in this internship program are considered as “mutual learning and discussing about teaching skills”? This way of thinking would provide a consultation support for teachers as well as students of multiple cultures.

**Key Words:** second foreign language, French

**要旨：**教師としてフランス語を教え始めてから10年が経つ。この10年で自分でも幾らかの経験を積んできたのだが、その中で常に頭に置いていたのが、「どうすれば、授業が上手にできるのだろうか?」ということであった。“上手に”と行っても色々な意味があるが、フランス語に興味を持ちフランス語を学ぶことを選んでやってきた学生・生徒が、フランス語を学び、さらには自ら進んで学習するようになる、そしていつか自分でフランス語圏の国に出向いていき、国外の人々とフランス語を操って渡り合うようになる、そのきっかけとなる授業を行うことが、自分にとっての第一の理想である。一方せっかくフランス語の授業を受けてみたが、フランス語がわからない、難しすぎる、思っていたよりつまらない、また教師が嫌いである、その結果としてフランス語が大嫌いになってしまう。その原因を作ってしまう教師になることは何としても避けたいと考えながら、日々の活動を行ってきた。

ここ最近、日本におけるフランス語教育の状況はますます厳しくなっている。しかしただこの状況を嘆くばかりで、何も努力しないとなれば、それはフランス語教師としての仕事を放棄しているに等しい。コマ数が減る、学問としての優先順位が下がる。それでもやはり、フランス語を学ぶことを必要としている者、フランスやフランス語圏の国々に興味を持つ者がいる。何らかの必要に迫られて、フランス語を学ぶことを必要としている者がいる。さらには、何となく学び始めたけれど、面白くなっ

てきた、そんな人たちのために、改めてフランス語教師としての技術を高めたい。そしてできれば、自分の身の回りからフランス語を盛り上げたい。

本論考は、まず、これまでの自分の実践について振り返り、さらには、2019年の夏にフランスで開催された研修において学んだ内容を紹介し、第二外国語を学ぶという、教育的に非常に大切な時間である授業において、どのように教師として、その授業を活性化し、学習者にとって有意義なものにしていくかを考察していきたい。

キーワード：第2外国語教育

## 1. どのような授業を目指すのか

かつて、自分が初めて教壇に立つという頃、恩師が言った言葉は今も忘れることはない。「自分が習った方法ではなく、自分が習いたかった授業を作れば良い」と。そこで、自分のこれまでのフランス語の授業を振り返り、印象に残ったことを思い出してみる。すると、授業中に自分が努力して頑張った記憶、フランス語を用いて何かを作り上げた記憶、そして授業中に些細なことでも教師に褒められた記憶、また教師が楽しそうに話してくれた自分の好きな作家についての話し、フランス滞在中のエピソードの数々——が思い出されてくる。“自分が習ってきた方法ではなく、自分が習いたかった方法”，それを実現していけばいいのだということは、フランス語を教えるようになって最初に自分が心がけるようになった事柄である。

では「自分が習いたかった方法」とはどんな方法なのであろうか。問いはそこから始まる。いくつか考えてみると——わかりやすい授業・楽しい授業・能動的に参加できる授業・たくさん発言できる授業・インプットとアウトプットの両方がある授業・眠たくない授業・受け身ではなく、自分の頭を使う授業・言葉だけでなく、文化的なことも知れる授業・興味を惹く内容が詰まっている授業・文字情報だけではなく、視覚的情報も用いた授業・クラスメイトとの交流がある授業・厳しいが、自分が鍛えられる授業・自分の成長が感じられる授業・時間通りに始まり、時間通りに終わる授業——と、考え始めればたくさんの事柄が思い浮かぶ。ここで重要なのは、できるだけ多くの習いたかった授業、逆に面白く感じられなかった授業をリストアップしてやることである。そうすることで、自分の考えが整理されてきて、自分が目標とする理想の授業が見えてくる。

自身が学生当時に主流であったいわゆる文法訳読法と言われる方法も、決して悪いものばかりではなかったが、その授業が楽しくて、ワクワクしていて、能動的でアクティブな時間であったかというところではなかった。どちらかといえば、じっと耐えてそこに座っていた印象が強い。先生のキャラクターがせめてもの救いだった。リスト作りを通して、自分がこれから行おうとする普通の授業においては、教師が一方的に教科書を読み進め、解説し、そして練習問題を解かせ、学習者が積極的に授業中に発言し能動的に活動するということがあまりないような、伝統的な教授法にならないように、できるだけわかりやすく、能動的に授業に参加でき、自分の頭や体をアクティヴに使い、そして文化的なことも時々紹介されるような授業を作っていけばいいのだということを意識することになる。

## 2. 授業づくりに役立つ活動

自分にとっての理想的な授業についての目標が定まったところで、では実際に授業を作るあたって、どんな努力をすれば良いのかを考えなければならない。“教師というものは、学びのプロでもあらねばならない”，というようなことはよく耳にすることである。そして本気で教育を学ぼうとすれば、自分自身をオープンにして、開いた状態で全てを吸収するつもりで挑まなければならないだろう。教師は考えている以上に、コミュニケーションを用いて行う労働である。そのことを念頭に置いて、自分自身をオープンにして行う地道な努力とはどのようなものかを考えた。以下に挙げるものは、自身が行ったフランス語の授業の質を高めるための行動である。

・できるだけ沢山の授業を見学する／研究会に参加する／フランス語に限らず、参考になる教育関係の書籍を読む／複数免許を取得する／国内外の研修に参加する

上に挙げたことは、基本的なことであるが、自分が人並みにフランス語の授業ができるようになったのには、このような活動が役に立ったと実感している。例えば、できるだけたくさんの授業を見学するという点についてである。学生の時、授業中に意識的に教師の教授法を観察してはいなかった。初めて自分が他の教師の授業を意識的に見学する機会を持ったのは、大学院生になりフランス語の高校の免許を取得しようとしてからの、教育実習が初めてである。実習中には、フランス語の授業だけでなく、数学や社会、英語など他教科の授業もできるだけ観察し、うまいとされているベテランの先生の授業も多く見学した。つまり、フランス語の授業が少なかった分、逆に他の授業を見学する時間はたっぷりあったわけである。また、博士課程になってから、教授のアシスタントとして、数年間、数種類の授業に同席する機会もあった。そのときに毎回授業に出て、授業助手をしながら、大学での授業とはどのようなものか、学生を惹きつける授業とはどのようなものなのか、どのようにすれば学生が授業に耳を傾けるのかということや、大学での授業の作り方を観察する機会を持つことができたのは、今思えば有意義な時間であった。

そして教師になってからは、関西フランス語研究会<sup>1</sup>に属し、そこで知り合った先生方の授業を観察する機会も持つことができた。授業見学をお願いすることは、まず一つの大きなハードルである。しかし、誰の実践も知らずに、自分の世界に閉じこもってしまうと、なかなか良いアイデアは生まれず、また行き詰まってしまうことも多い。なので、思い切って、オープンな気持ちで、身近な先生方の中から、授業見学をお願いするとよい。教育熱心な先生ならば、そこで断る人はいない。

授業見学で大事なことは、ただ授業を観察するだけでなく、自分にとってその授業が具体的にどのような点で参考になるのかを振り返ることである。授業見学ではできるだけ、メモをとる。そして、教師だけでなく、学生の反応にも注意を向ける。そして、見学した後は、必ず見学させていただいた先生に、色々質問をしてみるとよい。いいな、使えそうだなという方法論は、すぐに使ってみる。そのままやってみることもあるが、自分流にアレンジすることが大切である。また、研究会で普段の実践を交換し合うのも良い。先に挙げた関西フランス語研究会の他に、関東では Péka<sup>2</sup> という研究会も存在する。また、もっと身近な現場においても、意見交換は可能である。例えば、講師控え室や教員室では、フランス語だけでなく、ドイツ語やスペイン語の先生とも授業について会話をしてみるとよい。すると意外な実践方法が聞きだせることがあるし、様々な経験を積んだ先生方がいるので、休憩中の雑談も研究会に出席するほどに非常に有意義なひと時になる場合があるので、自分から積極的にコミュニケーションを取るとよい。

フランス語教育に関する書籍は多くはないが、1995年出版の『フランス語をどのように教えるか』が出版以来長い間、フランス語を教えようとする者にさまざまな知恵を与えてきた。自分自身もこの本に何度も助けられた。このような必読書を熟読することはもちろんのことであるが、それに加えて、フランスで出版されている教育書を読むことや、教科書に付随されている指導案を参考にすることも役に立つ。そしてもっともおすすめのものが、フランス語教育に関する以外の教育書やビジネス本も読むことである。より良い授業を作るための要素として、理想とする授業を実現させていくためには、それ以外の要素も大切となってくる。

それ以外の要素とは、授業を作る段取り力や、授業を行なっている時の目線や立ち居振る舞いなど、すべてを含む。それらを学ぶときには、初等教育や中等教育向けに書かれた、学級づくりの書籍や、教職課程を履修したものなら一度は耳にしたことがある向山洋一の教育書のシリーズ<sup>3</sup>や、教育に関する書籍を多数出版されている齋藤孝<sup>4</sup>の著作を読むのも良い。そこには上手い授業のコツや、良い教師とはどのような教師のことであるのかが繰り返し説明されている。また、ビジネス書で有名な D. カーネギーの『人を動かす』なども、授業運営に参

1 1987年に関西フランス語教育研究会(RPK)は活動を開始した。2016年には第30回大会を迎えるなど、歴史の深いフランス語教育の研究会の一つ。詳しくは <http://rpkansai.com> を参照のこと。

2 Pédagogie を考える会(Péka)は、1990年に発足し、年6回例会を開催。詳細は <http://peka-web.sakura.ne.jp> を参照のこと。

3 学芸みらい教育新書の向山洋一シリーズは現在18巻まで出版されている。

4 非常に多くの著作があるが、中でも『新しい学力』(岩波新書)は、最近の教育現場の傾向を捉えているし、大学でのアクティブラーニングについても書かれているので、役に立つ一冊である。

考になることが多い。このように、直接フランス語とは関係がないように思える本も、授業づくりに有意義な読書となるのは間違いはない。

私がこれらのフランス語の教育書以外の本を読むようになったのは、複数免許の取得と書店でのフリーター経験がきっかけである。大学院生からフランス語の教師として駆け出しの頃、経験不足でとにかく不安であった。また、時間もあった。先に述べたように、フランス語の免許を取得したものの、限られた数の実習しかこなさなかったことにも不安があった。なにせ、自信がなかったのである。将来何かあった時のために、という気持ちもあり、中学・高校の英語の教員免許も取得することにしたのである。最初の教育実習とは違い、2度目の教育実習では、たくさんの授業実習をこなすことができた。そして、英語での実習を、これはフランス語で置き換え可能であると考えながら行えたことは良かった。また、ALT<sup>5</sup>の授業に参加できたことも非常に勉強になった。数年後、今度は小学校の免許を取得することにした。3度目の教育実習では、グループ活動中心の学習も思い出され、子どもたちの学びの喜びの原点、国語教育を通しての言語を学ぶときの原点を思い出させてくれ、非常に勉強になった。

自分の身の回りで、複数の免許を取得している同僚は結構多い。特に実際に高校で第二外国語を教えている先生などは、英語の免許を合わせて持っている場合が多い。これからフランス語の教師を目指そうという人に、そう簡単に勤められることではないが、教育の中における、フランス語の立ち位置を意識することや、大きく学校教育というものを考えるきっかけになるし、教材がしっかり確立している英語などの教授法は、フランス語教育でもそのまま応用できるものも多いので、参考になることが少なくない。できることなら「教育とは何か」を学べる教職課程の履修は是非おすすめしたい事柄である。

現在では小学校教師の免許を生かして、授業の合間に放課後児童支援員<sup>6</sup>、いわゆる学童保育の指導員の仕事もしている。これらのフランス語教育とは一見遠いように思える活動も、回り回ってフランス語教師としての仕事に役に立っている。実際に、学童保育で働き始めてからの方が、授業が上達したと言われることもあるぐらいである。予想するに、教室をを観察する力が付いたのではないかと思う。学童保育では、児童が室内でどのような過ごし方をしているのかを注意深く観察することが必要であるので、そこで鍛えられた観察力は、授業実践に大いに生かされているのである。

以上のように、自分がこれまで行ってきた、様々な教育書を読み、フランス語とは直接は関係の無い活動を行うという、一見遠回りにも思える努力も、決して無駄ではないのである。資格を取るのが無理でも諦めることは無い。学ぼうと思えば先に紹介したような研究会もあるし、書籍で学ぼうと思えば、自分の努力でいくらでも学ぶ機会がある。そして、同じ教員室で過ごしている先生たちとの雑談も同じくらいの効果がある。

そして、それ以外にも、年に1度フランス語教師のために開かれている日本フランス語教育学会(SJDF)/日本フランス語フランス文学会(SJLLF)とフランス政府の協力で開かれている東京での研修(スタージュ)や、さらにフランスで行われている研修にも参加することができる。その他にも、日本にいながら現地の大学で取得することができるコースもあるし、やる気があるものには、様々な国内外の研修があるのである。次の章では、自身がこれまで参加した、国内外の研修について振り返り、研修の意義について考察する。

### 3. 国内外の研修参加について

自分がこれまでフランス語教育の技術を磨くために行ってきた活動の一つに、スタージュ参加がある。初めてスタージュに参加したのは、2012年のことである。このスタージュは、毎年3月中旬から下旬にかけて4日間の日程で東京のInstitut français Tokyoで開かれている。初めての研修は、東日本大震災の翌年で、前年度のスタージュが開かれなかった関係で、例年より多くの参加者がおり、彼らと共にフランス語教育についての理論や授業づくりの実際を学ぶことができた。当時はまだ実際に教壇に立ってから3年余りの時期で、グループで一から授業を作り、模擬授業をフランス語で行うという活動では、緊張からどぎまぎして、全く思うような活動ができなかった。しかし、フランス語を教える技術を磨きたいと全国から集まった人たちとの交流や、フランス留学中に

5 ALT(外国語指導助手) Assistant Language Teacherの略。

6 兵庫県が学童保育の支援員に研修を行うことで認定する。

パリで出会った友人たちと、研修で再会できたことは有意義であった。

東京の研修を経て、その年の夏に、カナダのケベック州、モントリオール大学でのスタージュにも参加することができた。日本から派遣された5名の教師らと共に、モントリオール大学の寮に滞在しながら、約3週間、座学と文化講座を中心としたプログラムをこなした。この研修では、自身のフランス語力の欠如を思い知らされることになったが、それでもフランス語はフランスだけで話されているのではない、というフランコフォニーの懐の広さを知ることができたのは良かった。

研修を受講することの意義をいくつか挙げてみると、まずは、普段、なかなか交流のない同じような境遇の教師たちと交流できることにある。様々な背景を持ち、様々な環境でフランス語を教えている者たちとの交流。模擬授業等の共同作業には、多少の困難さもあるが、模擬授業づくりを通して次第に絆も深まる者である。あの時の苦労を共有した、という記憶は、その後自分の現場に戻って仕事をしていても、かつての友の成功を耳にしたすりすれば、嬉しいものである。

もう一つの意義としては、フランス語のブラッシュアップにつながるということである。普段、現状では、フランス語で授業を行う機会はあまりない。しかし、研修では、模擬授業をフランス語で行わねばならない。自分の担当であるこの10分がなんと長いことか。フランス語での授業を体験して、改めて自分の未熟さを知ると共に、いつかはきっと、すべての授業をフランス語で実施してみせる、という強い意識にもつながる。

また、授業づくりの他に、講義もある。講義には、世界を股にかけて活躍するフランス人の教育実践家がわれわれに、フランス語教育の歴史から実践のポイント、また様々なアプローチによるアクティビテを紹介してくれる。内容はすべて身に付けたいと思えるものばかりである。フランス人の先生だけでなく、チューターとして日本のフランス語教育に従事する先生方の講義があり、実践的なアドバイスをその場で受けることができる。

2012年に初めてこの研修を受けて以来、7年の年月が過ぎた。その7年のうちに、授業をする学校も増え、経験もある程度積んではきた。しかし、どこか自分の実践にマンネリを感じ、もっと新しい、最新の教育技術を学びたいという欲が出てきていた。そこで、2019年、二度目の東京スタージュに参加した。

右も左もわからなかった7年前とは違い、自分もいくらか落ち着いて模擬授業を行うことができるようになっていた。そして前回のスタージュでは内容を理解するので精一杯であった講義も、自分のこれまでの実践と照らし合わせながら聞くことができた。再び講義を聞くと、講義内容もパワーアップしていた。要するに、教育を取り巻く環境や方法論は、日々変化しているのだということを強く意識することになった。そして東京での研修を経て、今度はフランスで2週間のスタージュに参加することとなった。

#### 4. ブザンソンスタージュ

2019年8月5日から8月16日までの2週間、フランスの東部にある都市、ブザンソンにあるフランシュ・コンテ大学で開かれた *Université pédagogique d'été* に参加した。今回のスタージュには、7月下旬から行われた前半に4名と我々後半に4名が日本から参加した。参加のためには、3月下旬に行われた東京でのスタージュに参加し、そこから希望者が面接を経て、選抜され、派遣が認められた。以下がこの研修の1日の流れである。

〈1日の流れ〉

- 8 h 30~10 h            モジュール1時間目
- 10 h~10 h 30        休憩
- 10 h 30~12 h        モジュール2時間目
- 12 h~13 h 30        お昼休憩
- 13 h 30~15 h        モジュール3時間目
- 15 h 30~17 h        アトリエないしフォーラム

〈授業について〉

このスタージュの決まりごととして、2週間毎日受講する3つのモジュール (Modules) と、単発で組まれているフォーラム (Forums) を3つ履修するないし、モジュールやフォーラムとは別に、3日間続けて行われるアトリエ (Ateliers) を1つ履修することが義務であった。登録したモジュールは以下の3つである。

1時間目には *Intégrer le numérique dans ses pratiques de classe* という講義で、デジタルコンテンツを授業でどのように活用するのかというものを履修した。普段の授業において、いくつかの学校ではインターネット等を用いることができる環境で教壇に立っている。しかし、デジタル機器を使いこなしているとは言い難い。そこでよりよい活用法知るべくこのモジュールを履修した。Call 教室で行われた講義では、実際にパソコンや自分のスマートフォンを駆使しながら、自分がこれまで知らなかったツール *Vocaro* や *Kahoot!* といった Web ツールを知ることができた。*Vocaro* では、自分の PC やスマートフォンに録音した音声ファイルを、QR コードにすることができ、学習者はスマートフォンで QR コードを読み取るだけで、保存された音声ファイルを受け取ることができ、このファイルは簡単に共有や交換ができるので、様々な授業で活用され始めているということであった。また、*Kahoot!* では、教師が自分で簡単にクイズ形式の問題などを作ることができる。作ったクイズやコンテンツを学習者は番号を入力することで同じ画面でプレイできるなど、ゲーム感覚で楽しいアクティビテを行うことができるものである。これらを用いたアクティビテの作り方を学ぶことができたのは良かった。

2時間目のモジュールとして選んだのが、*Motiver les ados à travers une pédagogie active* である。このモジュールは、アクティブな教育実践をとおして、思春期の学習者のモチベーション向上を目指すことを目的としていた。アクティブであることを目指していることもあり、毎回の授業で、たくさんのバリエーションに富んだアクティビテが紹介された。世界中から集まる思春期の学生を持つ教師の悩みには、共通点が多かった。15名程度の教師たちと、学生時代に戻ったように、夢中でアクティビテを実践した。その実践から、授業中のアクティビテの大切さを身を持って体験した。

3時間目には、*Concevoir et animer des formations pour jeune public* という、先ほどのモジュールよりもさらに若い6歳から12歳までを対象とした学習者の授業をどのように活性化させるか、ということに主眼を置いた講義を受講した。もしかしたらいつか若い学習者に対して、授業を行う機会もあるかもしれないと受講した。この講義を担当していた先生は、音楽活動も行われている先生で、発音の矯正の仕方やリトミックを得意とされている方であった。英語教育におけるリトミックの存在を知っていたが、フランス語でのリトミックの存在を知ることができた。日本では若い学習者を対象としたフランス語の教育法を学べる機会がなかなかないので、貴重な体験であった。

次に、フォーラムを紹介する。一つ目は、*Comment gérer son stress* というもので、最近話題となっている呼吸法や瞑想を用い、教師自身や学習者がストレスをいかに軽減して授業に臨むのかということに主眼が置かれたものであった。リラックスするための呼吸法などを実際に体験したり、みんなの成功体験を聞いたりしたことが、なかなか新鮮で面白かった。2つ目は、*Visite culturelle: musée des Beaux-arts et d' Archéologie* で、実際にブザンソンの美術考古博物館に出向いて、学芸員の方からレクチャーを受けながら作品を鑑賞するというものであった。ブザンソンにある美術品や展示物には、貴重なものも多く、大変興味深かった。また教室から出て文化を学ぶのは、よい息抜きになったし、ローマ時代の遺跡も数多く展示されていたので大変興味深かった。3つ目のフォーラムは、*Parcours découverte: Besançon, une ville pleine de surprises!* という講義では、まず大学の敷地内に残っているローマ時代の遺跡について学び、そこを出発点として、街中に点在する今も身近に存在している歴史的な彫刻や建築を見て回り、丘を登って教会を訪ね、最後にヴィクトル・ユゴーや映画のリュミエール兄弟の生家を巡るといった内容で、ガイドブックには載っていないブザンソン固有の歴史的遺物について学ぶものであった。

アトリエも1つ履修した。アトリエは3日連続開かれている講座である。履修したアトリエは、*Didactiser un document authentique* というもので、新聞やチラシやパンフレット、ネット動画など、実際の素材を用いて、それを授業の教材にするという実践授業であった。普段の授業でなかなか自分自身生きた素材を授業で活用できていないという課題を感じていたので、実際にどのように授業に取り入れていくのかを学べればと、履修した。

授業は、① *document authentique* を実際に用いてどのように授業を作っていくかというプロセスを確認(1日目)し、②次に実際のニュースを教材にして、まず分析し、そして自分ならどのような授業を作るかを考え(2日目)、③最後に実際に教材を自分たちで見つけ、授業案を作成する(3日目)という流れであった。3日目にブザンソンを紹介するパンフレットを教材に選び、授業づくりを行った。授業はグループワークやペアワークが進められたので、それが良かった。他の参加者と交流することが相乗効果を生み、彼らの経験を共有することから色々学ぶところがあったのが最も有意義な点であった。

授業の他にも、夏の間、世界から集まる研修生に向けて、様々な文化活動が用意されており、それにも参加することができた。その一つには、自分が2つ履修していた授業を担当していた先生のブザンソンのホールでのコンサートである。フランスの有名なシャンソンや、スペイン語の歌、また母国であるギリシャの歌やオリジナルの歌をピアノとバイオリンを伴奏にして歌うというもので、同じ授業で仲良くなったノルウェー・エジプト・セルビアの友人らと一緒に鑑賞した。次に参加したのは、オー・ドゥーへの一日日帰り旅行である。オー・ドゥーの城塞の散策やフランシュコンテ地方の料理に舌鼓、またスイス国境の川を船で周遊し、スイス側に上陸、国境の橋を渡る。再びフランス側に戻り立派な滝も見ることができるといふ盛りだくさんのバス旅行。そして、ブザンソンの街を囲むように流れるドゥー川を遊覧船でひと回りするツアーにも参加。スタージュの終盤には、ドイツのフライブルクを訪れるバス旅行に参加した。フライブルクは、中世の面影を残した、歴史深い街で、是非また訪れたいと思う場所であった。

ここまで、夏に参加したブザンソンでの研修をざっと振り返ってきたのであるが、海外での研修のメリットは、現地に滞在し、生活しながらどっぷりと文化と言語につかることができることである。2012年のモントリオール大学での研修でも、今回のブザンソンの研修でも、どちらも講義の他に、現地の文化を紹介することに多くの時間が割かれていた。それは、研修先である国や地域が、いかに自分たちの地域の文化を外国から集まった教師たちに紹介するという点を重視しているのかがわかる。

本スタージュに参加して最も有意義であったのは、世界中様々な環境でフランス語を教えている教師たちと交流できたことであろう。短い期間ではあったが、それぞれのバックグラウンドを抱えた教師たちと意見交換をし、学び合い、励まし合い、議論したことは、自分のモチベーションの刷新につながった。世界中のフランス語教師が、自分の普段の実践を見つめ直し、よりよい授業を求めて学ぶ姿には励まされたし、彼らは私の持っていないものをたくさん持っていた。そしてそれを惜しみなく私にも与えてくれようとしたことが、嬉しかった。スタージュを終えて帰る頃には、またどこかで！と笑顔で挨拶をし、互いの連絡先を交換し、そして今でも時々メッセージのやり取りをしている。自分は一人ではない、そして世界は広いが、志を同じくすれば、フランス語教育を通して、我々はとても近くにいることができるということが実感できたのが最大の収穫であった。

## おわりに

日々の実践に誠実に取り組む中で、当たり前のことであるが、目の前の仕事、目の前の学生をどのように向き合っていくのかを考えることに集中し、日々の実践を誠実にやっていくことだけが、その答えになるということ意識するようになった。自身のフランス語の授業をより良いものにするために、さまざまな研究会にも顔を出した。そこでは、自分と同じような悩みを持つ教師たちがいて、それぞれの教師が努力しており、その姿には、自分も大変励まされた。そして冒頭でも述べたように、フランス語を学んでみたが、フランス語が難しすぎる、つまらない、教師が嫌いである、結果としてフランス語が大嫌いになってしまう。その原因を作ってしまう教師になることは、何としても避けなければならないとの一心で、現在の授業実践に日々勤しんでいる。

とは言え、毎年生徒・学生の顔ぶれは違ふし、クラスの集団はさまざまな個性を持ち、人数も年齢も背景も思いも目的もバラバラである。そのような差異に満ちた集団を、まとめなければならないのである。正直、いくらか経験を積んだ現在でさえも、毎年4月になれば、緊張するものであるし、実際に教壇に立ってみなければわからないところもある。フランス語を学ぶという共通点を持って集まりつつも、それぞれの思いを持った生徒たちを前に、授業がスタートしてからの軌道修正も予想しつつ、最善の準備をして授業にのぞむのがプロの教師としての誠実な態度であろう。現実はそのように甘いものではなく、厳しい。そして理想と現実のギャップに悩み、または早々と諦めてしまふようになる。

そんな時には、国内外のスタージュで知り合ったどこかで頑張っている教師たちの顔を思い浮かべてみる。自分の生徒・学生が楽しくフランス語を学ぶ姿を想像してみる。すると力が湧いてくる。自分が学ぶことをとおして経験した楽しさを後世に伝える。それが今後の使命であると強く思う。自分が楽しんで教壇に立つ限り、フランス語教育の現場は無くならないと信じている。そして、異文化理解と一言で言うけれども、その理解は身近な交流の中で実感されるものである。一人でも多くの学習者に、異文化交流の大切さを伝えながら、今後も授業づ

くりに励みたい。そして本論稿で触れることができなかった現在の授業実践に関しては、またの機会に報告したい。

〈参考文献〉

- ・『フランス語をどのように教えるか』中村啓佑・長谷川富子著，駿河台出版社，1995.
- ・『学芸みらい教育新書』，向山洋一著，学芸みらい社，全18巻，2015-2017.
- ・『新しい学力』，齋藤孝著，岩波新書，2016.